

日本語の母音における音象徴の研究

吉岡 ちさと

要 旨

本研究は、日本語の母音における音象徴を明らかにすることを目的とした。そのため、質問紙を用い、日本語母語話者が「大きい」「小さい」「明るい」「暗い」「広い」「狭い」という概念と日本語の5母音との間にどのような関連性を感じているのか調査、分析し、これらの関係性を調音音声学的観点から考察した。結果として、「大きい」・「明るい」・「広い」という概念は「あ」、「小さい」・「狭い」は「い」、「暗い」については「お」と関連が見られた。

【キーワード】 音象徴・忖意性・母音

1. はじめに

「豆がばらばらこぼれる」、「豆がぼろぼろこぼれる」、これらはともに豆がこぼれる様子を言葉にして表したものである。しかし、この「ばらばら」「ぼろぼろ」を聞いた時、日本語の母語話者であれば、この2つの表現から伝わってくる豆が落ちていく様子についてそれぞれ違ったイメージをもつであろう。例えば、「豆がばらばらこぼれる」と聞いた時は、豆が広い範囲にわたってこぼれていく様子を思い描くのに対し、「豆がぼろぼろこぼれる」と聞いた時では、豆が狭い範囲で少しずつ落ちて行く様子を思い描くであろう。

ここにあげた「ばらばら」「ぼろぼろ」について、その音韻構造を見てみると、子音は**/b/**/**t/**の連続であり、母音が**/a/**/**o/**と異なっている。このことから、この母音の相違がわれわれの思い描く豆のこぼれる様子に違いをもたらしていると考えられる。

言語について述べる時、特に音(言葉)とその意味との関係を問題にする時、言語学では常に両者の結びつきの忖意性、偶然性、慣習性が唱えられる。確かに、例えば「カオ」という音について考えてみた時、この「カオ」という音と、日本語の「顔」という概念の間には何ら必然的な関係がないと言える。なぜならば、「顔」という概念を表す言語音が日本語では、「カオ /kao/」であるのに対し、一旦国境を越えてしまえば、それは韓国語では「얼굴 /olgul/」、中国語では「脸(臉) /liǎn/」、英語では「face /feis/」

などになる。一見してわかるように、音と意味の間に何ら一貫性が見られない。そのため、「顔」が「カオ/kao/」である必要性はなく、音と意味の間には関連は見られないと言える。

しかしながら、これらの例はいわゆる言葉(語、またはそれが持つ概念)と意味の結びつきであり、音と意味の関係を表すものではない。本稿で述べたいのは、前述の「ばらばら」「ぼろぼろ」中の母音のように、音と意味に関連が見られることもあり、それらを結びつけているのは、「音象徴」であるということである。「音象徴」とは、音がただ物理的な音ではなく、それ自体が、例えば「大きい」、「小さい」というように、何らかの意味を持ち、その音を聞いたものにあるイメージを喚起する触媒として機能するものである。

言語の恣意性、必然性について考えると、言葉が使われ始めた時、本当に何の手がかりもなく、ただ恣意的に音と意味は結び付けられたのか、という疑問が湧く。そこに何らかの必然的な関係が見出されたからこそ、音と意味は結び付けられ、さらにそれが人間にとって受容可能なものであったからこそ、その関係が確立されていったのであろう。そして、その関係を結ぶものこそが、「音象徴」であったと考える。

今までの音象徴に関する研究は、その多くが観察に基づくものであり、あまり実証的に検証されてきていない。そこで、本研究では質問紙を用いて、日本語の音象徴を明らかにすることを目的とする。日本語母語話者が、ある特定の概念と日本語の母音の間にもどのような関係を見出しているのかを調査し、明らかにする。

2. 先行研究

2-1. 恣意性

言語の「恣意性(arbitrariness)」は、言語学の概説書を開くと必ず言われていることであり、ソシュールの唱えた記号学において、言葉と意味の関係性をいう時使われる(石黒・山内・赤楚・北林・宇多・伊藤・須川・川本:1996、田守・スコウラップ:1999)。動物の叫び声と人間の言語を比べたときに、気がつくことの一つに、言語は子音と母音の組み合わせから成り立っているということ、そして考えられる無数の母音子音の組み合わせから成り立つ単語には、どういう意味が与えられるかは全く恣意的なのである(Wilson:1981)。

2-2. 音象徴

一般的に音と意味の関係は、恣意的であるとする立場と有契的であるとする立場の2つにわかれる。また、無契的である=恣意的であるということは、ソシュール以来、近代言語学の前提となる基本的な概念となっている(田守・スコウラップ:1999)。しかし、音が意味を担うとする音義説は、洋の東西を問わず古くから言われていることであり(堀井:1986)、Sapir 1929 以来、音声と意味の間の対応関係については、一部の研究者達によって常に論じられてきたことである。また、そのような音声と意味の間に関係があるとする立場をとる研究者が拠りどころとしているのが、「音象徴」という概念である。

音象徴は、音が単に物理的な音としてだけではなく、それ自身単独で何らかの意味も持ち、聞いた者に何らかのイメージを喚起するという考え方である(牧野:1999)。また、田守・スコウラップ(1999:7)では、音象徴を「音声またはそれを含む特定の語の固有の意味とは別の象徴的な意味、すなわち一般的に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味を示唆することがある。これを音象徴(sound symbolism)という」と述べている。つまり、音象徴は言語に固有、または言語間を通しても見られる、音または単語の意味における恣意的、慣習的な関係を超えた象徴的なイメージであるというのである(上村 1964、上村 1965)。田守・スコウラップ(1999)では、「慣習的な関係」にまで言及し、音象徴の普遍性をも示唆しているといえる。ただし、音象徴が各民族に固有の言語体系の域を超えないものであると捉えるか、普遍的であるのかについてはまだまだ議論の余地が残るところである。

3. 研究目的と研究方法

3-1. 研究目的

本研究の目的は、日本語における母音の音象徴を明らかにすることである。日本語母語話者が日本語の5母音とある特定の概念との間に関連を感じているのかを質問紙により調査する。「大きい」、「小さい」、「明るい」、「暗い」、「広い」、「狭い」という概念との間に、何らかの関係を感じているのか、また感じるとすればどのような傾向があらわれるのかを分析、考察する。研究課題として以下の2つを設定する。

研究課題1 ある概念と母音との間には、関連が見られるのか。

研究課題2 関連が見られるとすれば、どのような傾向が見られるのか。

3-2. 研究方法

研究課題 1 を明らかにするために質問紙を用いた。6 つの概念と母音との関係を調査するために、2 モーラから成る無意味音節を選択肢とした質問紙を作成した。1 つの質問につき、選択肢は 3 つあり、それぞれ 2 モーラから成る無意味語である。回答する際は、提示された概念と 3 つの選択肢のうち最も適当であると思うものを 1 つ選択する。選択肢の無意味語は、全てひらがなで表記した。また、母語である日本語への連想が少なくなるように、無意味語を作る際、既存語にあるものはできる限り使用しないよう調整した。

母音の選定については、5 母音から 3 母音を取り出すと 10 通りになる。この 10 通りの母音の組み合わせを 10 の質問項目に振り分けた。ただし、/i/u/e/ という組み合わせについては、欠損値が認められたため、今回の分析対象からは外した。さらに、子音の影響については、先行研究によりすでに明らかにされているものについては極力その使用を避けるようにした。

調査は、長野県長野市にある国立・私立大学で、英語または英語教育を専攻している日本人の学生 103 人から協力を得た。性別の内訳は、女 93 人、男 10 人であったが、今回は性別による差異を考慮し、対象者を女性のみに絞った。よって、対象者の総数は 93 人となった。

4. 分析方法

質問紙から得られた回答から、まずは音象徴ごとに全体の数量的傾向を見る。その後、それぞれの概念における質問項目ごとに見られる傾向を数量的に表す。また、提示した概念と選ばれた母音との相関を見るため χ^2 検定を行った。

研究課題 1 を明らかにするために、まずそれぞれの概念ごとに母音が選ばれた数を合計し、どの母音が最も選ばれているか、また選ばれにくいかを明らかにする。

また、研究課題 2 について、研究課題 1 で明らかにされた結果から、そこにどのような傾向が見られるかを調音声学的観点から分析、考察する。

5. 結果

5-1. 「大きい」・「小さい」

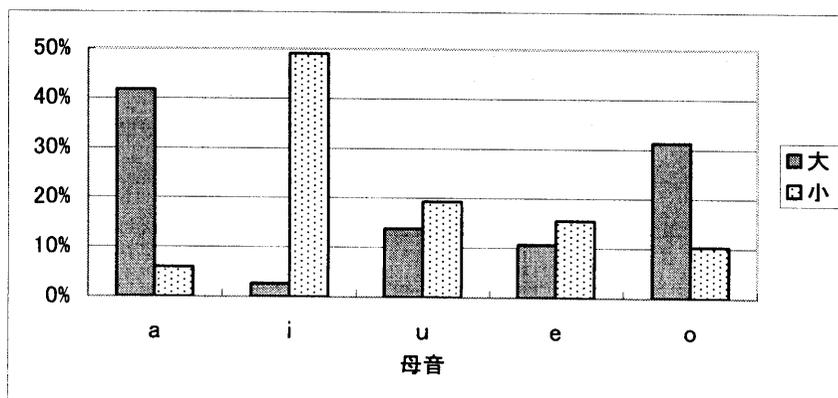


図 5-1 「大きい」・「小さい」と選択された母音の総数

「大きい」「小さい」で選ばれた母音の順序は、「大きい」では、/a/>/o/>/u/>/e/>/i/、「小さい」では、/i/>/u/>/e/>/o/>/a/であった。

表⁽¹⁾5-2 「大きい」・「小さい」における質問ごとの総数・ χ^2 値

大 き い	a i u	a i e	a i o	a u e	a u o
	73 1 18	78 2 12	37 1 54	67 14 12	31 33 28
	84.06***	101.21***	43.46***	57.75***	0.38
	a e o	i u o	i e o	u e o	
68 9 15	7 18 67	8 26 58	22 22 48		
62.57***	60.55***	38.06***	13.37**		
小 さ い	a i u	a i e	a i o	a u e	a u o
	3 74 15	1 89 2	0 89 3	8 49 36	42 28 22
	85.72***	151.47***	151.59***	26.06***	6.25*
	a e o	i u o	i e o	u e o	
7 55 30	74 10 8	79 4 9	41 21 30		
34.20***	83.64***	104.35***	5.95		

「大きい」において、/a//u//o/という組み合わせを除いた全ての組み合わせに有意な

差が見られた。*/a/u/o/*という組み合わせでは、選ばれた母音と「大きい」の間に関連はないという結果になったが、それ以外の組み合わせでは、ほぼ0.1%水準で母音と「大きい」の間に関連が見られた。また、全体的な傾向からも見られるように、選ばれた母音には*/a/*が多い。

「小さい」について、最もよく選ばれている母音は*/i/*であり、その次に*/u/*と*/e/*が選ばれている。*/a/u/o/*以外の組み合わせでは、0.1%水準で母音と「小さい」との間に関連が見られた。

3-2. 「明るい」・「暗い」

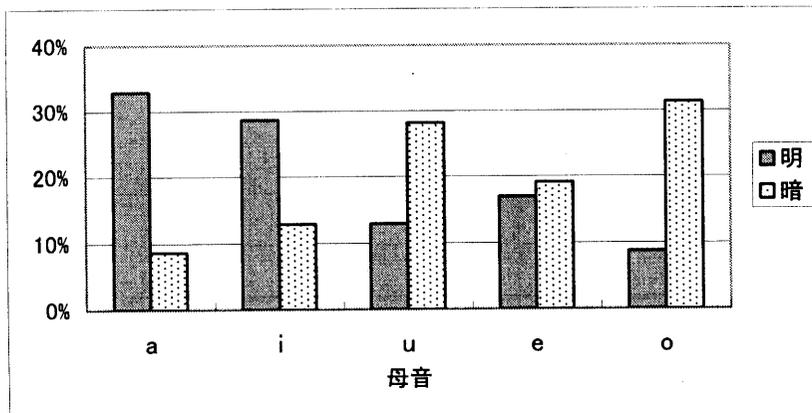


図 5-2 「明るい」・「暗い」と選択された母音の総数

「明るい」・「暗い」で選ばれた母音の順序は、「明るい」が*/a/ > i/ > e/ > u/ > o/*、「暗い」が*/o/ > u/ > e/ > i/ > a/*であり、「明るい」と「暗い」がまったく逆の傾向を表している。

表 5-4 「明るい」・「暗い」における質問ごとの総数・ χ^2 値

	a i u			a i e			a i o			a u e			a u o		
	明 る い	47	37	6	40	39	11	47	27	16	38	27	26	75	7
30.47***			18.07***			16.47***			2.97			101.27***			
	a e o			i u o			i e o			u e o					
	41	38	11	62	19	9	48	29	13	38	31	21			
18.20***			52.87***			20.47***			4.87						

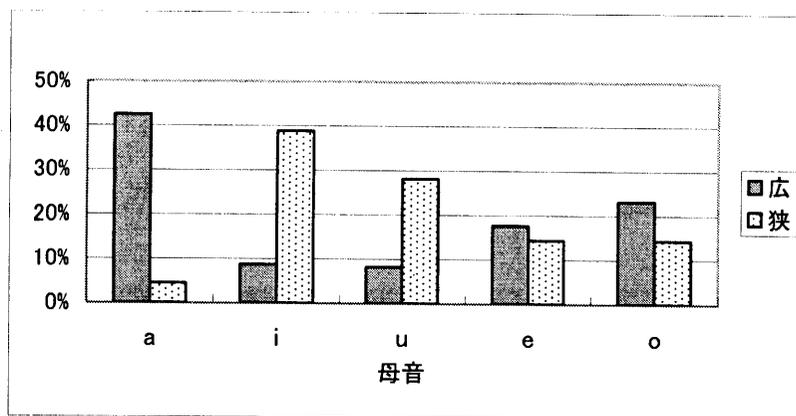
暗 い	a i u	a i e	a i o	a u e	a u o
	13 21 56	20 15 55	11 31 48	16 44 31	7 64 19
	34.87***	31.67***	22.87***	13.10**	60.20***
	a e o	i u o	i e o	u e o	
9 25 56	14 23 53	16 16 58	24 16 50		
38.07***	27.80***	39.20***	21.07***		

「明るい」では、/a/u/e/と/u/e/o/以外、全て 0.1%水準で両者の間に関連が見られた。/a/を含む組み合わせでは、必ず/a/が選ばれ、/a/を含まず/i/を含む選択肢の場合は、/i/が選ばれている。これは全体で見られた傾向と同じである。

「暗い」では、全ての組み合わせにおいて、0.1%水準で両者の間に関連が見られた。

3-3. 「広い」・「狭い」

図 5-3 「広い」・「狭い」と選択された母音の総数



「広い」は、/a/>/o/>/e/>/i/>/u/、また「狭い」は、/i/>/u/>/e/>/o/>/a/という母音の順序になっている。

表 5-6 「広い」・「狭い」における質問ごとの総数・ χ^2 値

広 い	a i u	a i e	a i o	a u e	a u o
	67 15 9	70 5 16	60 3 28	58 10 23	53 9 29
	67.15***	79.89	53.88***	40.68***	32.04***

	a e o	i u o	i e o	u e o	
	61 20 10	28 14 49	11 27 53	18 43 30	
	48.21***	20.48***	29.66***	10.32**	
狭 い	a i u	a i e	a i o	a u e	a u o
	4 56 31	4 67 20	0 79 12	17 53 26	13 63 15
	44.64***	70.78***	119.63***	23.45***	52.89***
	a e o	i u o	i e o	u e o	
	5 39 47	49 22 20	61 13 17	49 15 27	
	32.83***	17.32***	46.82***	19.63***	

「広い」・「狭い」という概念においては、「広い」における/u/e/oという組み合わせで、1%水準で関連が見られた以外、全て0.1%水準で、選ばれた母音とこれら両方の概念の間に関連が見られた。よって、ここで選ばれた母音と「広い」・「狭い」という概念は関連があるといえる。また、非常にはっきりした傾向を示しているといえる。

「広い」では、/a/が最もよく選ばれており、/a/が組み合わせ中にあれば必ず/a/が選ばれている。/a/を含まない場合は、/o/がよく選ばれている。ただし、/u/e/o/という組み合わせでは、/o/を含まながらも/e/が選ばれている。この/a/o/e/という順序は、全体的な傾向と重なる。

また、「狭い」では、/i/が選ばれる傾向が強く、/i/が含まれた場合には、必ず/i/が選ばれている。さらに、/i/を含まず/u/が含まれている場合には、/u/が選ばれている。そして、/i/も/u/も含まない、/a/e/o/という組み合わせにおいては、/o/が選ばれており全体的な傾向と重なる。

6. 考察とまとめ

主に母音の分類基準である(1) 舌の高さ、(2) 舌の前後の位置、(3) 円唇性のうち、主に(1)(2)を分析の観点として考察を進める。また、(1)(2)と深く関わってくる、口腔内容積についても考慮しながら、考察を進める。

6-1. 「大きい」・「小さい」

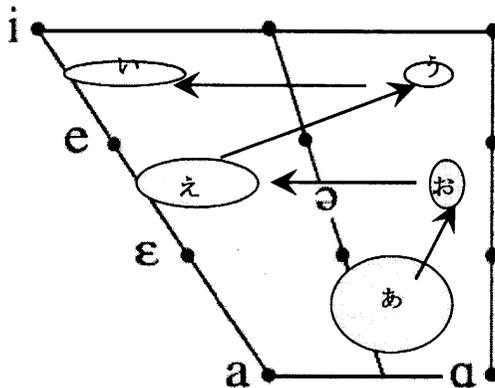
上村(1965)では「大きい」について選ばれた母音の順序は/a/>o/>e/>u/>i/、また「小

さい」についてはその逆の/i/>/u/>/e/>/o/>/a/の順であった。本データの「大きい」/a/>/o/>/u/>/e/>/i/、「小さい」/i/>/u/>/e/>/o/>/a/と上村で得られた結果を比較すると、一部「大きい」について/u/と/e/の部分において違いが見られる。

「大きい」という概念について、上村(1965)の調査では、まず低母音(/a/)が選ばれた後、中母音(/o/e/)、高母音(/u/ /i/)が選ばれたという結果になっており、前後関係よりも高さが影響したといえる。しかしながら、本データでは上村とは異なり、**中舌低母音の/a/**、そして**後舌母音(/o/u/)**、**前舌母音(/e/i/)**の順で選ばれている。このことから、高さよりも、母音の前後関係が影響していることがわかる。

「小さい」については、上村では「大きい」と逆の、**前舌高母音/i/**>**前舌中母音/e/**>**後舌中母音/o/**>**後舌高母音/u/**>**中舌低母音の/a/**となっており、これは本データの結果と同じである。また、「小さい」については、「大きい」とは異なり、高さよりも前後関係が影響しているということがいえる。

最もよく選ばれた母音について言うと、多くの先行研究(Sapir 1929, Newman 1933, 上村 1965, 堀井 1986, Jakobson 2002, Hamano 1998, 苧阪編 2001)で言われている「大きい」について/a/、「小さい」について/i/というように、同様の結果を得た。これは/a/が広母音であり、また、日本語の母音の中で発音する際の口の形、口腔内の面積が最も大きくなる母音だからではないかと考える。また、反対に/i/は、最も高い位置で、かつ前の方で発音されるため、口腔内の面積が最も小さくなるためであると考えられる。



図⁽²⁾ 6-1 「大きい」における母音の順序

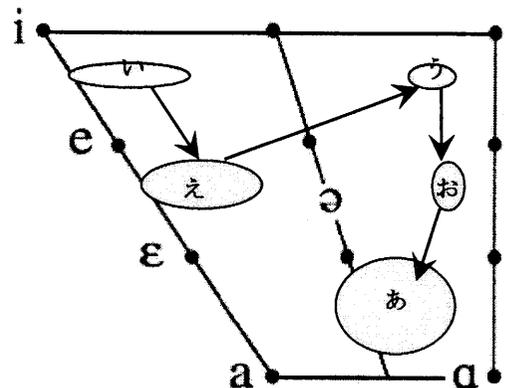


図 6-2 「小さい」における母音の順序

6-2. 「明るい」・「暗い」

上村(1965)では「明るい」「暗い」という概念と母音の関係について、「明るい」に

は前舌母音が、「暗い」には後舌母音が選ばれるという傾向が明らかにされている。しかし、本研究では上村で得られた結果とは若干違う結果が得られた。

/a/が最も明るく、かつ最も暗くないと認識されている。そのため、/a/には「明るい」というイメージを喚起する力があることがわかる。さらに、本結果から見る限り、高低関係よりも前後関係の方がより影響しているということがいえる。

母音の前後関係の方が重要視されているが、「明るい」については、より舌が高い位置の母音の方がより「明るい」に選ばれ、反対により舌が低い位置の母音の方がより「暗い」というイメージに選ばれる傾向も見られた。言い換えると、前で発音される母音の方が後で発音されるものよりも明るいと認識されていること、また高い方が明るく低い方がより暗いと認識されているともいえる。

これらの傾向は全て、発音された時の聞こえ方から説明できる。/a/という母音について考えると、口を大きく開くことによって口腔内の面積は広がり、より外に向かって響くようにはっきりと発音される。また、「明るい」と認識される前母音については、後ろで発音する母音に比べ、音がこもらずはっきりと聞こえる。このことが「明るい」・「暗い」という語に対する音象徴に影響していると考えられる。

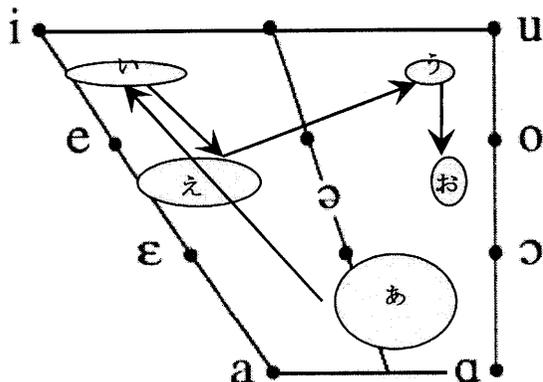


図 6-3 「明るい」における母音の順序

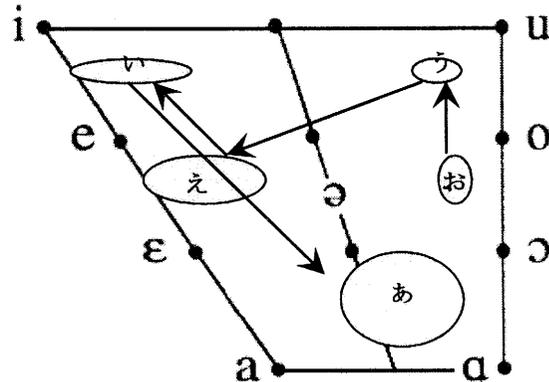


図 6-4 「暗い」における母音の順序

6-3. 「広い」・「狭い」

Hamano(1998)では、/a/がより広い範囲を表し、/o/がより狭い範囲を表すとされている。しかし、結果として、最も「広い」という概念については/a/が選ばれたが、/o/が反対の傾向を示すという結果は得られなかった。代わりに、/o/は/a/に次いで「広い」と感じられる母音に選ばれた。また、「広い」という概念については、母音を生成する

際の舌の前後関係が影響を与えていると考えられる。同じ高さでも前で発音される母音の方が「広い」と感じられ、反対に、同じ高さでも後ろで発音される母音の方が「狭い」と感じられるという傾向が見られた。

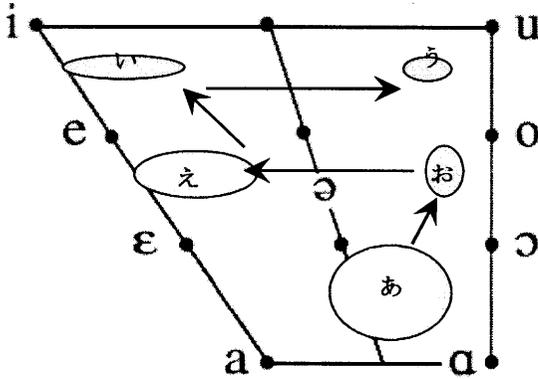


図 6-5 「広い」における母音の順序

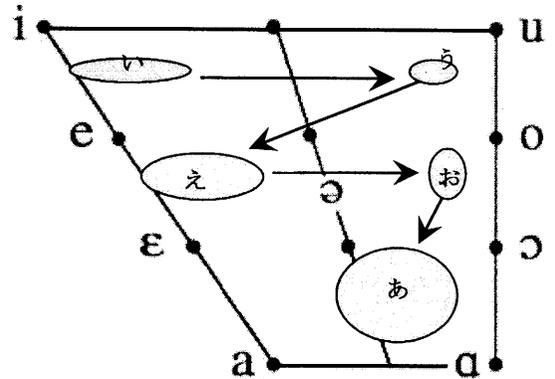


図 6-6 「狭い」における母音の順序

7. まとめと今後の課題

研究課題ごとに明らかになったことをまとめる。

研究課題 1

「大きい」「小さい」、「明るい」「暗い」、「広い」、「狭い」という概念について、それぞれ際立って選ばれやすい母音、また選ばれにくい母音など、概念によって選ばれる母音に違いがあった。

研究課題 2

「大きい」「小さい」、「明るい」「暗い」、「広い」では、前母音から後母音の順、またはその逆、高母音から低母音の順、またはその逆の順になるように選ばれた。

なお今後の課題として以下のことがあげられる。今回は日本語の母音の音象徴を明らかにするというを目的とし、まずそれが存在するのか、またその傾向をつかむことを第一と考え、より多くの日本語母語話者に調査するために、質問紙調査法を取った。しかし、質問紙をデータ化する中で、個人的な傾向もあるように見られた。そのため、今後、質問紙とインタビューを併せた調査も考えられるであろう。

言語学において、言語の恣意性という概念があまりにも当たり前のこととして受け入れられ、一部の研究者を除き音象徴という概念は、事実上無視されてきた。また、音象徴を研究対象としてとりあげる研究者もいたが、それらの研究では主にいくつか

の語を取り出してそこから音象徴を記述するにとどまっていた。この背景には、音象徴自体が母音・子音の相互の影響、また文化的な要素など複雑に絡み合っているため扱いにくいこともある。しかし、あまり実証的研究がなされてこなかったことは非常に残念なことである。本研究が、今後の音象徴における実証的研究に向けた足がかりとなれば幸いである。

よしおか ちさと / アサンブション大学

chiss357@hotmail.com

注

(1) 表に提示してある母音は、*/a/i/u/*, */a/i/e/*, */a/i/o/*, */a/u/e/*, */a/u/o/*, */a/e/o/*, */i/u/o/*, */i/e/o/*, */u/e/o/* という組み合わせの順で示している。また、二段目の数字は、その母音が選択された数を表し、最も多かった母音と数には網掛けをした。三段目は χ^2 検定の結果から得られた χ^2 値(* $p<.05$ 、** $p<.01$ 、*** $p<.001$)である。

(2) 図中の、○の大きさは口腔内容積を表す。

参考文献

- (1) 石黒昭博・山内信行・赤楚浩之・北林利治・宇多千春・伊藤徳文・須川精緻・川本祐未(1996) 『現代の言語学』 東京：金星堂
- (2) 上村幸雄(1964) 「言語音声は何を伝えるか」『言語生活』4, 東京：筑摩書房, 18-25
- (3) 上村幸雄(1965) 「—特集 擬音語・擬態語— 音声の音象徴について」『言語生活』12, 東京：筑摩書房, 66-70
- (4) 荻阪直行編著(2001) 『感性の言葉を研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』 東京：新曜社
- (5) 田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『日英語対照研究シリーズ6 オノマトペ 形態と意味』 東京：くろしお出版
- (6) 堀井令以知 (1986) 「特集 擬音語・擬態語 擬音語・擬態語の言語学」『日本語学』5, 4-12
- (7) 牧野成一 (1999) 「音と意味の関係は日本語では有縁か 鼻音 vs. 口蓋音と文法形式のケーススタディ」アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育 実用的言語理

論の構築を目指して』東京：くろしお出版, 1-32

- (8) 矢田部達郎(1948) 「語音象徴について」『心理学研究』1:4, 1-8
- (9) Jakobson, R. & Waugh, L. (2002) *The Sound Shape of Language*, mouton de gruyter
- (10) Hamano, S. (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese* Vol. 10, *Studies in Japanese Linguistics* Masayoshi Shibatani Series Editor
- (11) Newman, S.S. (1933) Further experiments in phonetic symbolism, *American Journal of Psychology*, 45, 53-75
- (12) Sapir, E. (1929) A study in phonetic symbolism, *Journal of Experimental Psychology* 12, 225-239
- (13) Wilson, R. A. (1937) *The Birth of Language; Its Place in World Evolution and Its Structure in Relation to Space and Time*, London, J. M. Dent & Sons Ltd (渡部昇一・土屋典生共訳 1981 『言語という名の奇跡』 東京：大修館書店)

A Study of Sound Symbolism in Japanese Vowels

YOSHIOKA, Chisato

The purpose of the study is to investigate “sound symbolism” of vowels in Japanese. Sound symbolism is regarded as the opposite concept of arbitrariness and some researchers said that sound worked not only as a physical sound but also had some kind of particular meaning in itself and it evoked images related to the way they sound (Uemura 1964, Uemura 1965, Tamori & Schourup 1999, Makino 1999). In this paper, we used questionnaires then firstly the collected data was analyzed by descriptive statistical analysis and chi-square test as well. The presented concepts are “big,” “small,” “bright,” “dark,” “wide” and “narrow.” The result was analyzed from the phonetic point of view. As a result, it was found that “big,” “bright” and “wide” have something to do with /a/, “small” and “narrow” have something to do with /i/ and “dark” is related to /o/.

(Assumption University)